

IAUD Newsletter vol.3 第1号 (2010年4月号) 目次

1. 特集 : *towards2010* IAUD 2010 年度活動方針
～国際会議を契機に UD のさらなる普及発展と国際化を～ 1
2. 株式会社 ユーディット 第 25 回「障害者とテクノロジー会議」参加報告
～情報のユニバーサルデザインを体験する 5 日間～ 6
3. Case Study : 標準化研究ワーキンググループ
「IAUD UD マトリックス ユーザー情報集・事例集」出版の取り組み連携 10
4. 世界の UD 動向 : Design for All 財団 2010 年アワード授賞式
【UD2010 ウォッチング】ほか 18

今年度の IAUD の活動のハイライトは何と言っても 10 月末から静岡県浜松市で開催される国際会議です。今月号の巻頭特集では年度の初めにあたり成川理事長から今年度の活動方針を含め、会員の皆さまへのメッセージを伝えていただきます。

特集 : *towards2010*

IAUD 2010 年度活動方針

～国際会議を契機に UD のさらなる普及発展と国際化を～

理事長 成川 匡文

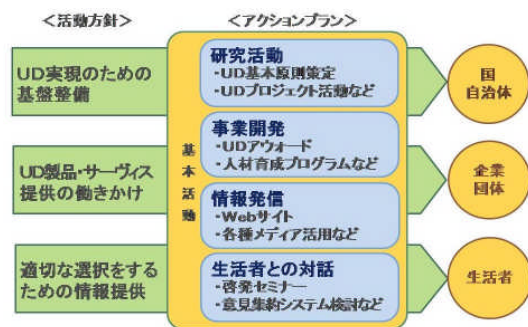


いよいよ 2010 年度がスタートしました。今年度は国際会議を IAUD 活動の核として位置づけ、IAUD のミッション実現に向けてさまざまな事業に取り組んでいきます。また、会議後は将来の IAUD のあるべき姿を見据えた法人化の検討も進めていきます。

「世界と協調し、ユニバーサルデザイン社会を創る。」という基本方針をベースとして、第 2 次中期活動計画で定めた活動の 3 つの視点で、UD 社会の実現に向けた基盤整備に資するため、国や自治体と連携した活動を行ないます。また、UD 製品やサービスを提供するように企業や自治体へ働きかけ、生活者が製品やサービスの適切な選択ができるように情報提供を行なっていきます。

そのために、まずは IAUD 会員が一丸となり、国内外にしっかりメッセージを伝え、IAUD の目指す社会の実現に向けて具体的な行動をおこしていきたいと思いますので、皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

先月 10 日の理事会につづき、25 日に評議員会が開催され、2010 年度の活動方針が固まりましたので、会員の皆さまに概要を以下のとおりお伝えしておきます。



IAUD 第 2 次中期活動計画

<2010年度活動方針>

- ・ IAUDにおけるそれぞれの活動の着地点、目標値（アウトプット）を明確に設定して活動する。
- ・ それぞれの活動内容の精緻化と深耕に努め、国際会議の場を活用した成果発表に向けて推進する。
- ・ 国際会議を契機に、国内外の UD 関連団体、及び研究者、そして生活者一人一人との交流を深め、UD の更なる普及発展と国際化を目指す。

<重点事業>

1. 「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2010」の主催

「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2010」の開催へ向け、組織委員会、および実行委員会と連携しつつ、準備・運営を行う。

2. 情報交流センターの活用強化

情報交流センター、およびサロンの有効活用に努め、UD 情報受発信機能の強化、会内外の活動交流の円滑化を図る。

3. 事業委員会の活用強化、及び事業化の促進

認定事業委員会、普及事業委員会、出版事業委員会の三事業委員会の積極的な運営を通して、UD 検定、及び認定・アワード等の事業化促進、またワークショップほか各種イベントの効果的な実施、そして各プロジェクト／ワーキンググループ活動から生じた成果物の出版等、IAUD の専門性、及び認知度の向上に努め、UD の一層の普及発展に貢献すると共に、これらの事業収入により IAUD 活動の安定的運営を図る。

4. 法人化を目指した体制整備の推進検討

IAUD が任意団体から公益法人へと脱皮し、さらに社会への貢献度を高めることができるよう、法人化を目指した体制整備の推進を行なう。

<事業内容>

1. 研究部会（研究開発企画部会から改称）

会員とプロジェクト／ワーキンググループの相互交流を深め、会員はもとより社会に貢献する研究・開発をさらに充実させ、その成果および提言を国際会議等で広く発信する。

(1) 住空間プロジェクト

誰もが心豊かに暮らせる「楽しい UD」を実現する住空間づくりを目指す。

① 楽しい UD、UD プラスの研究

身体的、精神的に適正な負荷（刺激）を与えることで、機能低下を防ぎ向上させるといった新たな UD のあり方を、事例研究や環境と心身機能との関係性の研究を行い、キーワードや仮説軸を導き出す。

② UD 先進事例の視察研究

住空間、各種施設などの先進事例調査を継続して、UD 視点における分析・考察を行ない、会員への情報発信を推進する。

③ 具体的生活行為から見た UD ワークショップの推進

様々な身体的状況のユーザーが生活している事例を観察・収集し、ユーザーニーズと住空間との対応を整理する。その際、ユーザーの感情や行為にも注目する。

(2) 移動空間プロジェクト

2010 年秋の国際会議における研究成果発表に向けて、移動に関わる新たなシームレス社会のあり方を策定提案する。従来のバリアフリー視点から、生活の中での移動による喜びや心の充足にまで視野を広げ、具体的製品やサービスに落とし込みうる指針を提示する。具体性向上と理解促進を図るため、適切な商品・サービスへの落とし込み事例（デザイン例）提案を試みる。

- ① 「JR 静岡駅～新静岡駅周辺」での調査を進める。静岡県、静岡市、静岡鉄道とのディスカッションを行ない、改善指針を提言する。

②調査手法の応用とさらなる改善を行なう。IAUD ウェブサイトで調査手法を公開、パブリックコメントを吸い上げ、国際会議にてまとめを発表する。

(3) 労働環境プロジェクト

さまざまな特性のあるたくさんの人が快適に働くことのできる未来オフィスの労働環境を提供することを目的とし、現在、オフィスの中で様々な用途で使われるようになった個人認証（IC カード等）の使いにくさの解消をテーマに、単なるカードやリーダーの改良ではなく、設置方法、利用方法というトータルな使いやすさを策定し、「オフィスにおける働きやすさとセキュリティの両立」を目指す。

- ①インターネット調査を分析し、個人認証の使いにくさの実際を定量化する。
- ②学術機関と共同で、個人認証の使いにくさ解決の為のアイデアの策定と実証実験を行う。
- ③国際会議にて、オフィス内の個人認証の課題の明示化と解決策の提言を行う。

(4) 余暇の UD プロジェクト

引続き「うれしい、楽しい、面白い」余暇の充実を目指し、従来の2チーム制の活動を統合し推進する。

①CM字幕の実現へ向けた活動

2009年度に引続き2011年デジタル放送移行に即し、関係団体と連携し、字幕付与実現を働きかけ、啓発用冊子の制作を行なう。併せて、ウェブのCM等動画コンテンツの字幕付与の促進も図る。

②交流会の UD

「だれでもが楽しめる交流会」をキーワードに課題を抽出し、改善提案を行なう。国際会議のイベント企画に、その成果をフィードバックする。

(5) 衣の UD プロジェクト

学術機関や公共機関、またUD用素材の利用や新規素材の開発を関連企業と協働する。UNIFAと共同で機能性とファッション性を備えたUD製品（UDジャケット）の開発、及びUDリフォームの仕組みの構築を行なう。アパレルメーカー、素材メーカーを新規会員にすべく勧誘活動を行なう。

プロトサンプルを使用して、着心地（着易さ）を定量的な検証に向けて、検証方法の検討や被験者の選定を行ない実施する。それらの結果をまとめ、評価・改善点を抽出し国際会議で発表する。

(6) 食の UD プロジェクト

「食」を取り巻く環境をUD視点で見つめ直し、生活者により快適な「食生活」を提供するための活動を行っている。

①「やけど注意」表示ピクトグラム

継続テーマとして進めている「やけど注意」2種、「蒸気注意」1種のピクトグラムを完成させ、IAUDのWebサイトでデータをダウンロードできるようにすると同時に、新聞や雑誌でアピールし採用に向けて積極的に活動する。さらに、海外の方に向けてマーク理解度を調査する。その結果をまとめ、国際会議で発表する。

②第3弾ウェブ調査実施

生活者調査として、食を取り巻くテーマでピクトグラムと関連付けた調査を約2,000名を対象に実施する。

(7) メディアの UD プロジェクト

メディアにおけるUD課題の中で、カラーUDに引き続き焦点をあてる。

2009年に発表された「カラーUD推奨配色セット」へ、使い手（作り手）視点からの考察で課題を把握する。学術機関等とも協働し、国際会議で研究結果を発表する。

①配色イメージから実用的な「CUD配色イメージ」を開発し、教育機関をターゲットに提言する。

②開発研究プロセスで発見した内容を整理し、次の研究課題へ取り組む。

- ③現状15団体ある参加企業（メンバー）を増強し（目標20団体）、テーマ別分科会方式への移行を目指す。

（8）標準化研究ワーキンググループ

UDの実現とその啓発に役立つ情報を、国内外の多様な産業界から収集・展開する。

- ①国際会議に向けて、海外ユーザー観点の追加検討
国際化対応として、海外ユーザーの特性調査結果を考察し、各国の特異/先進的な対応情報を追加するなどの、UDマトリックス（事例集も含む）への海外視点追加の検討を行なう。
- ②高齢者対応検討
専門家のヒアリングや施設訪問による特性調査/整理、また効果的対応手法の調査・検討を行ない、UDマトリックス等へ反映させる。
- ③UDマトリックス開発現場での適用と更なるレベルアップに向けた観点出し
ワーキンググループのメンバー企業の製品企画・開発に、UDマトリックスを活用・適用することで更なるレベルアップに向けて観点出しを行なう。
- ④将来UD標準化シナリオ検討
UD関連活動の調査を行なうことで、幅広く世の中のUD対応技術を把握する。その中から、中・長期視点でのUD標準化として取り組んで行くべきテーマ案を抽出する。

2. 情報交流センター

（1）グローバルな情報発信、情報収集の強化

IAUD各部会・委員会や国際会議の実行委員会とも連携し、WebのグローバルサイトやNewsletterのコンテンツ強化・充実を図る。国際会議の場を活用した参加者インタビュー、Newsletterの国際会議特別号企画など、会議の盛り上げ、アクセス数の増加・維持につながる施策を積極的に実施する。

（2）会員サポート強化

会員サイトの活動支援機能の強化、研究部会の活動成果掲載、UD情報提供など継続して実施する。

（3）研究部会活動活性化

研究部会とも連携し、UD関連の施設見学会、会員・関連団体との交流の場などを企画し実施する。今年度は国際会議が秋に予定されているため、年間2回程度の開催を目標とする。

（4）事業委員会活動サポート

各事業委員会とのコミュニケーションを深め支援する。特に今年度は国際会議プログラム（表彰、出版、ワークショップなど）の支援を重点的に行う。

3. 認定事業委員会

（1）UD認定表彰事業

国際会議のイベントとしてのアワード事業計画と実施を行なう。

- ①「IAUDアワード2010」の応募要項、全体推進スケジュールを作成する。
- ②審査基準を作成し、審査委員会の推進をはかる。
- ③国際会議での表彰式の運営及び表彰内容の開示を行なう。

（2）UD検定事業

今後の方向性を検討していく。

4. 普及事業委員会

（1）ワークショップ事業

2009年度のプレイヴェントによる「48時間デザインマラソン」は、今までの企画運営ノウハウの蓄積から、ワークショップの運営やチーム活動の充実度、チーム提案内容の著しいレベル向上ができた。また、過去に遡りワークショップ参加者全員に「修了証」を発行するこ

ととした。2010年度国際会議の「48時間デザインマラソン」では、過去のワークショップのベストデザイン賞受賞チームのリーダー招聘を軸とし、外国人リーダーやデザイナーの参加を募り、国際会議の活動に相応しい活動内容としていく。

(2) イベント事業

国際会議において、今後のIAUDのワークショップの展望を論議する「特別セッション」を計画する。「特別セッション」は、ワークショップ監修役の荒井先生とRCAヘレン・ハムリン研究所のカセム氏を招聘し、IAUDとRCA相互のデザインワークショップ活動報告や、今後のユーザー対話型ワークショップの展望と人材育成の重要性を軸にした論議を行なう内容とする。

5. 出版事業委員会

(1) 書籍等出版事業

- ①IAUDから出版物として対外的に発信すべき内容の一元化を、情報交流センターや研究部会と連携して進め、活動成果を積極的に情報発信していく。研究部会など活動主体と連携して把握し、出版の可能性のあるコンテンツを出版に向けて作業を進める。
- ②国際会議に関連した出版企画を、国際会議実行委員会とも連携して検討し出版する。2006年国際会議の事例をふまえ、国際会議実行委員会との情報共有、連携・分担を検討し、開催前、期間中、開催後の具体的なアクション計画を策定し、制作を進め、年度内完成を目指す。
- ③これまでの出版物の事業性の検証、新たな出版企画のシミュレーションを行ない、活動基準を継続して検討する。出版社、アウトソーシング先の検討、採算性のシミュレーションなどを行ない、活動基準を検討する。

6. 法務知財委員会

IAUDのあるべき姿を視野に、法務関連、知財関連を軸とした活動を展開する。

(1) 法務関連事業

法人化を目指した体制整備の推進とタスクフォースの支援を行なう。

- ①IAUDの中期事業計画との整合性をとりながら会員が活動しやすい体制、規定、規則などの整備を目指す。法人化タスクフォースを支援し、弁護士、公認会計士などと相談しながら11月までに体制整備案たたき台を作成し、評議員会に諮る資料作成を行う。
- ②会の運営に関わる法務関連事項について理事長特命事項を推進する。

(2) 知財検討事業

IAUDの活動から考案される成果の知財権について、各事業や体制整備と進捗を合わせながら検討する。

- ①対外的行事（セミナー、UD大会など）の知財側面からの事前検討を行なう。
- ②成果の権利化に向けて、要請があれば窓口として、都度、各委員会、研究部会の各プロジェクト/ワーキンググループを支援する。
- ③法人化の体制整備に伴い発生する知財権、商標権確保などに関わる取り決めの再検討を行なう。

7. 運営企画会議

IAUD運営上の課題抽出、及び諸問題の解決策策定を円滑に行ない、理事会へ答申するために、運営企画会議を設置する。運営企画会議の構成メンバーは、理事長、副理事長、専務理事、研究部会長、同副部会長、情報交流センター所長、同副所長、認定事業委員長、普及事業委員長、出版事業委員長、法務知財委員長、事務局長とする。

運営企画会議内に、状況に応じ、法人化等の問題に対応するタスクフォースを置く。

以上

第 25 回「障害者とテクノロジー会議」参加報告

The 25th Annual International Technology and Persons with Disabilities Conference ～情報のユニバーサルデザインを体験する 5 日間～

株式会社ユーディット
榊原直樹

株式会社ユーディットは、Web や情報機器などがより多くの人に使いやすくなるように、情報のユニバーサルデザインに関して調査・研究・コンサルティングを提供している。社員全員がテレワークのスタイルで働き、オンライン上でコラボレーションするサポートスタッフには、シニアや障害を持つ人も多くいる。

■「障害者とテクノロジー会議」とは

弊社では情報のユニバーサルデザインに関する海外の最新情報を集めるために、カリフォルニアで行われる「障害者とテクノロジー会議」に参加している。JTB がコーディネートし、弊社が協力して企画した会議に参加するツアーは今回で 12 回目の実施になる。このツアーには毎年、研究者や技術者、デザイナー、教育関係者や学生、ユニバーサルデザインを進める NPO など多様な人たちが参加し、会議だけではなく参加者同士の交流も盛んに行われている。

2010 年 3 月 22 日から 27 日まで、米国サンディエゴで開催された「障害者とテクノロジー会議」に参加した。今回で 25 回を迎えるこのカンファレンスは、世界 35 カ国以上、アメリカ 50 州からアシスティブ・テクノロジー、ユニバーサルデザインに関わる障害者、技術者、および教育者が集まる情報分野のアクセシビリティに関する世界最大級のカンファレンスである。日本からも多くの参加があり、セッションでの発表も行われた。

これまで 24 回にわたりロサンゼルスで開催されてきた本カンファレンスは、今年からサンディエゴへと開催地が変更になった。これにより 2 つのホテルに分散して運営されていたのが、セッションも展示会も 1 つの会場にまとまることになり、参加者の利便性がこれまで以上に高まった。

新たな会場となるカンファレンスホテルは Manchester Grand Hyatt Hotel San Diego である。高い天井のホールとツインタワーが印象的な高層ホテルで、5 日間のカンファレンスをゆったりとした気分で過ごすことができた。



写真：Manchester Grand Hyatt Hotel San Diego

■カンファレンスの模様

カンファレンスの主なセッションは 1 時間の枠で開かれ、様々な取り組みが紹介されている。最新の研究成果の発表や、企業の新製品の紹介などの他、教育現場や行政機関などでの実際の取り組みなどが紹介されている。事例発表のセッションでは、ディスカッションの時間をとって、会場内での情報交換がされることもある。

開催地が変更になった影響か、これまで常連だった参加者の顔ぶれが変わり、発表の内容にも変化を感じた。コミュニケーション支援機器の発表が少し減り、代わりに Web アクセシビリティや視覚障害者支援に関する発表が増えた。また、権利や法律に関するセッション Legal issue というタイトルの専用カテゴリーは、これまで以上に充実し、いくつもセッションが開かれていた。

Legal issue が増えたのは情報機器に関する政府調達に対してアクセシビリティを義務付けている米国のリハビリテーション法 508 条の技術基準の改訂作業が進み、そのドラフトが発表された事が影響しているのであろう。

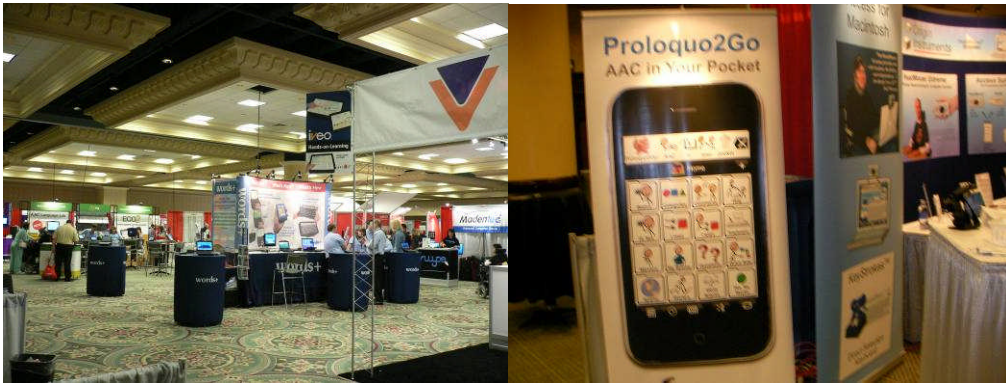


写真：リハ法 508 条に関する公聴会の模様

リハ法 508 条に関してはセッションとは別に同会場内で、技術基準を定めた委員会 (Access Board) のメンバーによる公聴会が実施された。公開された技術基準のドラフトに対して、会場に集まった参加者が委員に対してそれぞれの立場で、技術基準に対する意見を述べるのである。公聴会の一部しか参加出来なかったが、私が聞いた意見では概ね好意的な意見を聞くことができた。

カンファレンスのスポンサーの一角であるアップル社の iPhone は、コミュニケーション支援機器へも大きく影響を与えている。これまで自閉症などコミュニケーションが苦手な人の支援機器が PDA や専用の端末装置として開発されていたが、今年はこれらに加えて、iPhone アプリの形式で発売されたコミュニケーション機器が発表された。専用の機器を購入するよりもかなり安い金額で購入できるので、今後このような形式で開発される支援機器が増えることが予想される。

また会場内では視覚障害の人達が、アクセシビリティ機能である Voice Over を利用して音声読み上げ機能で iPhone を操作している様子をあちこちで見ることができた。日本のように高度な読み上げ機能を持った携帯端末が普及していない米国では、視覚障害者にとって便利な端末として利用されていることを直接確認する事ができた。



写真（左）：展示会場の模様

写真（右）：iPhone 向けコミュニケーション機器



写真：様々なコミュニケーション機器

サンディエゴは、住みやすい気候と全米でもトップクラスの治安の良さで、定年を迎えたシニアが最も移住したい街として知られている。実際、ホテルの対岸にあるコロナド地区には、シニア向けの高級住宅地が並んでいる。定住しなくても冬の間だけサンディエゴで過ごす人のためのショートステイ施設なども充実している。少し郊外に出れば医療や介護のサポートを受けられるシニアタウンがあちこちに存在している。そのような土地柄もあって、これまであまり取り上げられてこなかったシニアに関する発表も増えた。日本に比べてまだ高齢化率が低いアメリカでも、徐々にこの層への注目が高まっている現れだろう。

今回初めての分野の発表として、ソーシャルメディアに関したものが見られた。Facebook や LinkedIn などのソーシャルネットワークサービス自体のアクセシビリティに関して比較した報告や、それらのサービスを使って、サポートを行ったカナダの実施報告など興味深い話を聞くことができた。また、発表の最後のスライドに問い合わせ先として、Facebook や Twitter のアカウントを掲載することも多く、米国でのソーシャルメディアの浸透度を感じる事ができた。

カンファレンス自体もソーシャルメディアを活発に利用しており、Twitter ではカンファレンスに関するハッシュタグとして #csun10 が利用され、情報の共有が行われていたし、Twitter を利用するユーザーの集いも開かれ、参加者同士のネットワーキングが進められた。

■サンディエゴの街並み

カンファレンスの最終日の土曜日は午前中でセッションが終わるので、午後からはツアー参加者一同でサンディエゴ市内のバルボアパークに向かう。ここには、多くの博物館や美術館などが並ぶ巨大な文化施設である。中でも有名なのは動物園で、世界トップクラスの規模だそうなので、

見学してきた。様々な法律が整備されているアメリカだけに、園内もユニバーサルデザインが徹底していて、ほとんどの場所が車いすで移動できる。また坂道や行き止まりで車いすの通行が難しい箇所には、事前に看板などのサインで迂回路を示し、車いすユーザーが困らないような工夫がされている。動物たちは行動展示という動物の生態やそれに伴う能力を、自然に見られるように工夫がされており、迫力ある姿を見ることができる。オプションのコースでは、動物たちに直接触れることができるので、視覚に障害のある人たちも十分に楽しめる場所だった。

参加する前は開催地が変更された影響を心配したが、実際に参加すると会場が1つにまとまった利便性は大きく、効率よくセッションに参加出来た。またサンディエゴ自体がシニアに優しいユニバーサルデザインの街なので、とてもアクセシブルで非常に快適に過ごすことができた。次回はカンファレンスだけでなく、街に出て実際のシニアタウンを見学したいと考えている。

なお来年度のカンファレンスも今年と同じくサンディエゴで開催される予定である。

次回カンファレンス予定：

The 26th Annual International Technology and Persons with Disabilities Conference

日程：2011年3月14日～19日

場所：Manchester Grand Hyatt Hotel San Diego, California

<http://www.csunconference.org/>

なお詳細なレポートや、次回のカンファレンスの参加情報は、株式会社ユーディットのサイト上で公開する予定なので、こちらも参考にいただければ幸いです。

<http://www.udit.jp/>

Case study: 標準化研究ワーキンググループ

「IAUD UD マトリックス ユーザー情報集・事例集」出版の取り組み連携

鳶谷 邦夫 富士通デザイン株式会社
(情報交流センター 出版事業委員会担当)

IAUD UD マトリックスをいつでも手軽に使えるポケットサイズの本に！

■はじめに

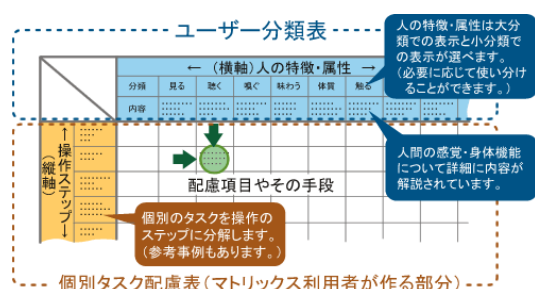
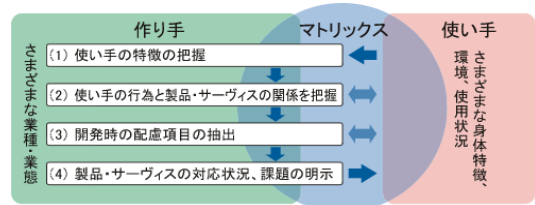
標準化研究ワーキンググループ(以下WG)では、2005年度からUD開発に標準的に利用できるツールづくりを目指し、さまざまな身体的な能力の違いや加齢により生じる状態など、多様なユーザーを理解するための情報をまとめた「IAUD UDマトリックス」の研究と作成に取り組んできました。まず、2007年10月にエクセルシート形式でIAUD会員向け発表し、昨年2月にはデータの更新と表示機能の追加をしました。続いてその内容をさらに手軽に使っていただくため、Webブラウザ上で閲覧できるようHTML化に取り組み、昨年9月には具体的なUD開発のヒントとなる事例を加えた「ユーザー情報集・事例集」としてIAUD会員サイトで公開しました。



そして、もっと身近において手軽にいつでもどこでも利用できるようなツールを目指し、今年2月に一冊のコンパクトな本として発刊しました。出版に向けた検討や具体的な作業は出版事業委員会が中心となって担当しましたが、印刷物としてのUD的な配慮という観点からメディアのUDプロジェクトとも連携して検討が進められました。ここでは本書の発刊にいたる経緯や3つのグループの連携について概要をご紹介します。

■エクセルシート版から Web 版、そして出版物へ

「IAUD UD マトリックス」は日本人間工学会アーゴデザイン部会から発表された「UD マトリックス」の考え方を発展させ、UD開発のさまざまな場面で作り手と使い手をつなぐツールとして使えるものを目指しました。一番の特徴はさまざまなユーザーに関する情報を鳥瞰的に一覧できることであるため、最初は全体を一つの表としてエクセルシート形式でまとめました。エクセルの機能を利用して表の一部を折りたたんだり、具体的なタスクを追加できるようにしましたが、表全体のサイズがかなり大きなものとなりました。



<エクセルシート版>



これを実際に使用し評価を繰り返す中で、もっと手軽なツールにできないか、ヒントになる UD 配慮の参考事例があると良いなどの意見が出てきたため、エクセルシート版の発展形として、エクセルシートをユーザーごとに切り分けてカードにし、大項目ごとにポケットファイルにまとめたカード式や、ビジュアル的にも見やすくまとめた「事例集」などの案を実際に試作してみました。プリンターで出力したものを WG メンバーが 1 ページずつカットし、バインダーにとじ込んで各自で使えるものを手づくりしました。そのまま出版物にするにはコストがかかり過ぎるということで、出版物にすることは一旦、断念しましたが、このカード式の「ユーザー情報集」と「事例集」の試作版が今回の本の出発点となっています。

<カード式> (試作版)

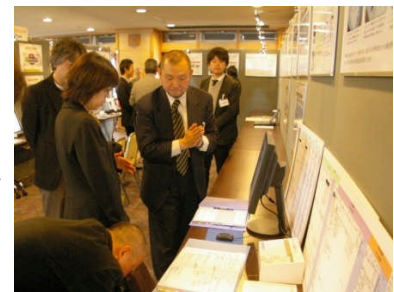


<Web 版>



そして次に取り組んだことは、例えば企業において、ものづくりの現場、デザイン部門、マーケティング部門などが一体となって UD 開発をしていくためには、もっと手軽に情報共有しやすいツールが必要と考え、ネットワークの利点を活かした Web 版を作ることに着手しました。Web 版をつくるにあたっては WG でエクセルシートやカード式の長所・短所をまとめ、より使いやすくするためのポイントを整理しました。また、これを機に内容の再度の見直しや用語の統一など、ツールとしての完成度を上げる作業も進めました。Web 化することの大きなメリットはネットワークを介してどこでも利用できること、見たいユーザー情報や事例をメニューで簡単に選択でき、ユーザー情報と事例を自由に行ったり来たりできることなどが挙げられます。これらの長所を最大限に活かすことを念頭に Web デザインを進め、2009 年 9 月に IAUD 会員サイトで公開しました。(Web 版の詳細は本誌 2009 年 5 月号をご覧ください。)

その一方でカード式の試作版は標準化研究WGとしては出版を断念しましたが、2009年2月に名古屋で開催された「2009年 IAUDユニヴァーサルデザイン大会 in 東海」でも展示し、来場者や理事の皆さんからも何とか出版物にならないかというご意見をいただき、また、Web版がIAUDに会員公開され、内容がさらに整理されてきたという背景もあり、出版事業委員会の2009年度の課題として具体的な検討がスタートしました。



UD 大会 in 東海での展示の様子

■出版事業委員会の取り組み

まず、出版事業委員会の作業として取りかかったことは、標準化研究 WG にて作成したカード式の原案をもとに「IAUD UD マトリックス」を出版物にする際、まずどのような改善案や新たな形式の可能性が考えられるのかを検討し、その可能性に対し、どれほどのニーズがあるのかを調査しました。また、この調査には、具体的にどれくらい買っていただけるのかという、採算性・事業性を事前につかんでおく目的もありました。

出版物としての可能性の検討

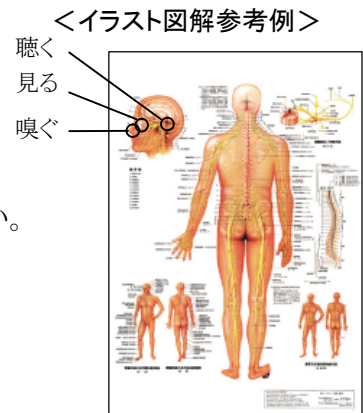
標準化研究 WG にて作成したカード式の原案をもとに、出版物としての UD 評価をメディアの UD プロジェクトと連携しておこない、その内容をベースにその改善案や新たな可能性について出版事業委員会で検討しました。

メディアのUDプロジェクトでは6月から9月にかけて全般的なレビューと意見交換をおこなった後、メンバーによるヒューリスティック評価、初見者へのインタビューを実施しました。その評価結果をもとに改善案を検討し、出版事業委員会にて方針を絞り込んでいきました。メディアのUDプロジェクトでは以下のような問題点が指摘され改善提案がされました。

1) 目次がないため、全体の構造の把握が困難。

<改善案>

- ・目次を設ける。
- ・目次をイラストで図解すると直感的に分かりやすい(右図)。

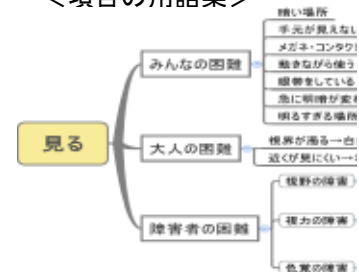


2) 初めて見る人にとって、専門用語と情報量が多く分かりにくい。

<改善案>

- ・項目の言葉の平易化を検討する(右下図)。
- ・用語はWeb版との統一も考慮が必要。
- ・各大項目の中トビラを目次のイラスト図解と連動させる。
- ・カードの項目は「項番」「対象機能・関連部位」「状態分類」とそれ以下の記述との間にスペースを設け、分かりやすくする。

<項目の用語案>



3) 各カードの記述が難解。

<改善案>

- ・記述の順序を統一し、イラスト図解を活用する。

また、評価結果のレビューと改善案検討会では次のような意見もでてきました。

- ・ポケットファイルは実際に使ってみるとカードの出し入れが意外とストレスを感じる。
- ・大項目と中項目のタブが縦横2種類あるのは混乱する、特に中項目の上端横方向のタブは、ファイルが横開きであることとの違和感が大きい。検索性を高めるには1次元構造でないともストレスを感じる。
- ・ファイル形式で情報を差し替えることはどれくらい有効か？本の形式で情報を固定化することを優先する考え方もある。変えない部分を固定化、追加・変更の可能性のある部分のみ入れ替える方法もあるが、利用者のレベルと目的にもよる。

(例：基本理解している人＝確認⇒カード、初心者＝学習⇒本 など)

以上のような経緯からエクセルシート形式と原案のカード式の他にも新たな形式の可能性が検討され、最終的に以下の4つの案に絞られました。

- ①通常のバインダー形式(ポケットファイルを使用しない)とし原案(A4)よりコンパクトにする。
- ②大項目ごとに分けたリング綴じの単語帳のようなカード形式でボックスに収める。
- ③大項目トビラ+ジャバラ折の表という本形式でエクセルシート形式の一覧性の利点を残す。
- ④コンパクトな縦長のブック形式

標準化検討WGではエクセルシート形式→カード式→Web版の順に展開してきましたが、WGでおこなった3タイプの特長比較を参考に、再度、印刷物にすることの利点を明確にして、その利点をさらに強化する方向で改善案を検討することとしました。

標準化検討WGによる3タイプの特長比較(下表)を参考に、メディアのUDプロジェクトでの評価と新たに提案された出版物としての4つの案について、出版事業委員会で評価を行いました。

標準化研究 WG による 3 タイプの評価と特長比較

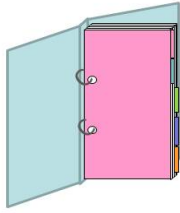

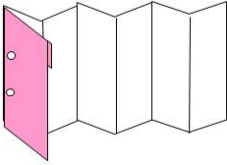
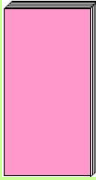
比較内容 ツール名	ユーザー全体像の把握しやすさ	開発対象・目的に応じたカスタマイズ	ツールとしての手軽さ、携帯性	ユーザー情報と事例の関連づけ	複数人数での共有、情報管理の容易性	求める情報へのたどり着きやすさ	特筆事項
エクセルシート形式 IAUD UD マトリックス	◎	◎	○	△	○	○	他の UD マトリックスツールのベースとなるユーザー情報集
カード式 ユーザー情報集／事例集	△	○	◎	◎	△	○	印刷物として扱いやすいため、手許に手軽に置いて現場へも持ち込みやすい
Web版 ユーザー情報集／事例集	○	△	△	◎	◎	◎	ネットワークを介し複数人数での情報共有やデータ更新などの管理が容易

◎:非常に適している ○:適している △:適さない面もある

その内容をまとめたものが下の表ですが、出版事業委員会の結論としては以下としました。

- ・最も費用対効果が高く携帯性/手軽さが優れている「④ブック形式(縦長ポケットサイズ)」を、UD 普及ツールとしての活用度、収益性のリスク回避の点からも評価し出版事業委員会の推奨案とする。
- ・原案の考え方に最も近く、より改善された「①バインダー形式」もツールとしての評価は高いため対抗案として残し、さらなるコストダウンを図り継続して出版の可能性を検討する。

出版事業委員会での改善案の評価

改善案	①バインダー形式	②リングカード形式	③トビラ+ジャバラブック形式	④ブック形式
イメージ				
企画意図	◎	△	○	○
編集作業	○	○	◎	○
費用対効果	△	△	△	◎
携帯性 手軽さ	○	○	○	◎
カスタマイズ	◎	◎	△	△

IAUD 会員アンケート調査と結果

出版事業委員会での検討結果をもとに IAUD 全会員に対し①バインダー形式と④ブック形式の2案に対するニーズと、IAUD 会員サイトで公開されているエクセルシート版と Web 版を含めた「IAUD UD マトリックス」全般についてアンケート調査を実施しました。調査はより具体的なイメージをつかんでいただくため、掲載内容と2つの案の具体的なサイズ(どちらも A5 変形の縦長)、価格、完成イメージなどを含めた出版企画案を添付して電子メールにより調査しました。以下はその概要です。

<実施概要>

- ・期間：2009年11月4～10日
- ・対象：全 IAUD 会員（正会員 130 社/団体、準会員 18 団体、賛助会員 68 名）
- ・回答数：48 件（回答率22%）

<結果概要>

- ①回答者のうちUD マトリックス使用率は全体の52%、また、未使用者のうち62%がその存在自体を知らなかった。
- ②出版企画に対する反応は2案を合わせると「ぜひ使ってみたい」が71%と概ね良好。
- ③バインダー形式とブック形式の割合は4：6でブック形式の支持率が高い。
- ④購入希望部数では2案を合わせ441部、そのうち約9割がブック形式。

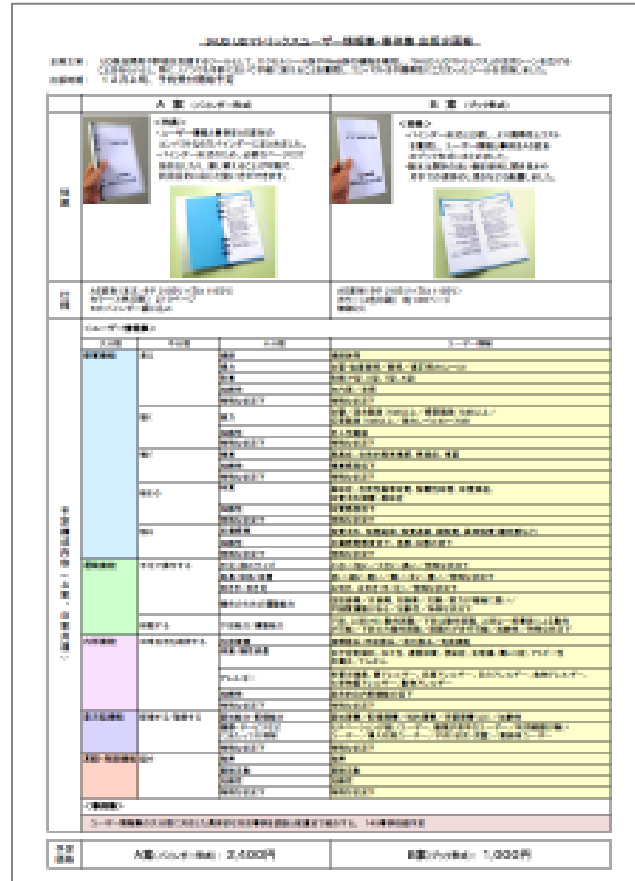
以上のアンケート結果を踏まえ、出版事業委員会の案としてはブック形式をベースにデザインとDTP作業を進め、12月に浜松で開催する国際会議のプレイヴェントで見本を展示して来場者の反応をお聞きしながら、予約受付を開始することとした。同時に販売見込みや採算性のシミュレーションも行い初版の印刷部数と販売価格を決定しました。

■メディアの UD プロジェクト、標準化研究 WG でのブラッシュアップ

IAUD 会員アンケートにより仕様のアウトラインが決まってきたので、ここまでの検討結果をもとに実際のデザイン案を作成し、印刷物としてのさらに詳細な UD 評価と具体的な改善案の検討をメディアの UD プロジェクトで実施しました。具体的なデザイン案作成にあたってはメディアの UD プロジェクトにゲスト参加されていた教育出版株式会社の金子氏にご協力いただき、デザイナーとして出版 UD 研究会などでも活動されている高橋貴子氏に依頼しました。

デザイン案の出力サンプルをもとにプロジェクトメンバーで評価と改善案検討をおこない、標準化研究 WG にも意見を求め、重要度に応じて対応できる項目についてはデザインに反映しました。しかし、記載内容自体の改善が必要な項目など、エクセルシート版、Web 版との整合性や全体的なコンセプト見直しを要する内容については、今後の継続課題として次版で検討することとしました。主な指摘内容と対応方法は以下のとおりです。

<アンケート用紙に添付した出版企画案>



メディアのUDプロジェクト、標準化研究WGでの主な指摘内容と対応

	指摘内容	重要度	対応方法
1	使用者のイメージ、どう使ってほしいか、などを書いた方がよい。	B	「はじめに」内容追加
2	ウェブ版、エクセル版との関係性を明示すべき。	B	簡単にツール比較し Web を紹介
3	パブリックコメントを求めたい旨を記載すべき。	C	「はじめに」と巻末で記載
4	調べたい事柄に、単純明快に辿り着けるようにしたい。	A	目次を詳細にし索引的機能を持たせる
5	情報階層が不明瞭＞章、節、項に番号つける、見出し、ツメの記載項目順序揃える。	A	前項で対応
6	ツメは左右両ページに入れるべき。ノンブルも大きくしたい。	A	対応済み、ノンブル番地的表現
7	各項目をできるだけ見開きをしたい(掲載順序変わってもよい)。	B	見直し済み
8	見出しの長いものを短く、本文とのジャンプ率を大きくしたい。	B	フォントで対応
9	文字が多く読みにくい。図表やイラストを入れられないか。	A	フォントで改善、コラムを追加 図表・イラストは次版で検討
10	句読点の入り方が不規則。	B	句読点は見直し済み
11	引用の年度などがばらばら。障害者白書の引用年度は揃えるべき。	B	最新データを採用、次版で検討
12	資料リスト(索引)がほしい。	B	出典は巻末に記載 目次を詳細にし索引的機能を持たせる
13	記載内容として「配慮方法」が読みにくい。	A	本書ではコンパクトさ優先 Web 版含め次版で検討
14	「事例集」の各項目を、「配慮事項」にリンクさせては。	B	事例少なく、大項目には対応している
15	余白が少ない。ノド、小口が狭い。地側も1行減らしたい。	B	対応済み(コンパクトさとのバランス)
16	フォントはIAUD会報誌ガイドラインにそって小塚ゴシックが良い。	B	対応済み

■カラーUDおよび環境への配慮

配色にあたっては、「ユニバーサルデザイン推奨配色セット/プロセスカラー版(第1版)」を参考にしました。この配色セットは、東京大学伊藤啓准教授、DICグループ、社団法人日本塗料工業会、NPO法人カラーユニバーサルデザイン機構の研究により策定されたものです。(詳しくはこちら→ http://jfly.iam.u-tokyo.ac.jp/color/CUD_set/)

また、「環境保護印刷(ゴールドクラス)」に準拠したプロセスで印刷しました。これは刷版/印刷工程で揮発性有機溶剤を使用せず、廃液を出さない、インキに含まれる揮発性有機溶剤は1%未満というものです。(詳しくはこちら→ http://www.e3pa.com/clione/sh_criterion.php)
用紙についても表紙は古紙50%、本文は古紙70%と環境に配慮したものを使用しました。

■利用シーンによるツールタイプの使い分け

Web版を発表した際にはエクセルシート形式とカード式との比較を行いましたが、次ページの表はカード式とWeb版の内容から展開させたブック形式の特長を改めて他の2つのツールと比較してみたものです。

オリジナルのエクセルシート形式とWeb版、そして今回のブック形式の3種類のタイプはそれぞれ一長一短があります。例えばWeb版はネットワークを通してどこでも見られるという大きな

特長がありますが、逆にパソコンなどの情報機器がないと見られないため使用環境が限定されます。エクセルシート形式ではユーザーの全体像を把握したり、開発対象に合わせてカスタマイズしやすいという特長があります。開発対象や活用のフェイズ、使用環境や目的などの利用シーン、使用者のスキルや職種などにより、使いやすいタイプをその特長を生かした使い方をするのが良いと思います。

また、今回のブック形式の出版物はその手軽さから、設計・製造の現場だけでなく、社内教育やデザインを学ぶ学生など教育の場でユーザーを理解するツールとしても幅広く活用されることを期待しています。

＜ツールタイプの比較表＞

ツール・タイプ	ブック形式(本書)	Web版	エクセルシート形式
特長	印刷物として扱いやすいため、手許に手軽に置いて現場へ持ち込みやすい	ネットワークを介し、多人数での情報共有やデータ更新などの管理が容易	他のUDマトリックスツールのベースとなるユーザー情報集
ツールとしての手軽さ、携帯性	●	▲	○
求める情報へのたどり着きやすさ	○	●	▲
ユーザー情報と事例の関連づけ	○	●	▲
多人数での共有、情報管理の容易性	○	●	○
ユーザー全体像の把握しやすさ	○	○	●
開発対象・目的に応じたカスタマイズ	▲	▲	●

●:非常に適している ○:適している ▲:適さない面もある

■読者の反応と対応

本書を発売してからまもなく2か月になりますが、購入していただいた方からお聞きしているところでは、おおむね好評で社内のセミナーで使われたという報告などもいただきました。しかし、書名に対するご意見として「UDマトリックス」ではなくもっと一般の方にも分かりやすい名前にするべきだ、という声もありました。Web版を発表した際、形式として「マトリックス」ではなくなったので「IAUD UDマトリックス」という名称をどうするかという議論をして、やはりオリジナルのコンセプトを何らかのかたちで表現しておこうということで、「ユーザー情報集・事例集」の下に小さく加えました。今回の本の表紙でも同様に「IAUD UDマトリックス」はメインの「ユーザー情報集・事例集」のショルダーとして小さめに表記したのですが、書名としてはその強弱が伝わらないため、今回のようなご意見がでてきたものと考えられます。標準化研究WGでは早速、この課題について検討をはじめており、次版ではもっと内容がストレートに伝わる分かりやすい名称に改めたいと考えています。

また、その他にもスケジュールやコンパクトさを優先して断念した配慮ポイントもあり、基本的な情報不足、さらに見やすくする工夫などの課題も残っており、皆様のご使用いただいたご意見などもしっかりと取り入れて、今後、さらに改善を重ねていきたいと考えています。

■まとめ

今回、発売した「IAUD UDマトリックス ユーザー情報集・事例集」の特長を簡単にまとめると以下の4つがあげられます。

1. さまざまな身体能力の違いや加齢により生じる状態など、幅広いユーザー情報を収録

分かりやすくするため人の身体能力を、見る、聴く、嗅ぐ、味わう、触る、などの日常的動作で分類し、ユーザーごとに、特徴、日本の該当者数、一般的な配慮方法、原因となる疾病、代替手段、自助具、携行医療機器、対処法、など幅広い視点でまとめた。

2. ユーザー情報の分類に対応した豊富な事例

UD開発のヒントとなる実際の製品やサービスの事例を146例収録した。

3. ハンディなポケットサイズ

常に手元において利用しやすくするため、片手での閲覧や携帯に便利な縦長のポケットサイズ[A5 変形：タテ21×ヨコ11cm]とした。

4. カラーUD や環境にも配慮

配色については「ユニバーサルデザイン推奨配色セット/プロセスカラー版（第1版）」を参考、印刷プロセスでは「環境保護印刷（ゴールドクラス）」に準拠した。



本書のオリジナルとなったエクセルシート版やWeb版も合わせ、実際の現場で使用しUD実践に役立てていくには、海外情報の強化などを含めさらにユーザー情報を充実させ、使い勝手の改善を重ねて完成度を高めていく必要があります。WGでもツール自体の評価プロセスとして、自動車や各種家電製品など、実際の製品評価でその実効性の検証を行いました。さらに幅広い会員の皆さまにもさまざまな具体的なケースで使用していただき、実績を重ねることで改善につなげていくことが重要と考えています。そのためには皆さんの情報をフィードバックする体制やしくみづくりも今後の課題のひとつであり、また、これらのツールの使い方のワークショップなどの教育や、実際の製品への適用支援などについても、WGの今後の課題として検討してゆきたいと思っております。会員の皆さまにもぜひ、ご意見・ご要望などお聞かせください。

なお、今回発刊した本書は、IAUD会員だけでなく誰でも購入いただけます。IAUDのイベントや、学校関係、関連団体、雑誌関係など幅広くPRしていきたいと思っておりますので、会員の皆さまにもぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

IAUD公開サイトでの紹介ページ：<http://www.iaud.net/udroom/archives/1001/28-185905.php>

世界の UD 動向

●Design for All 財団 の 2010 年アワードの授賞式が開催されました。

Design for All 財団のニューズレターによると、同財団が主宰するアワードの授賞式が、去る 2 月 26 日、スペイン・バルセロナ市において開催されました。

このアワードは同財団が“Design for All”をコミットし実践、促進している企業、団体や行政を顕彰することを目的として設立したものです。第 1 回目となる今回は財団の評議員により候補者が選定され賞が手渡されました。



授賞式は財団の年次夕食会に合わせて開催されました。財団によると最終的な選定は非常に困難を極めたが、すべての候補者の“Design for All”に対する取り組みの価値は非常に大きく、そのメリットを高く評価したいとしています。企業、団体、行政の 3 つのカテゴリーの受賞者は以下のとおりです。

<企業部門>

・ローレンス人形社 (Muñecas Llorens、スペイン)

【活動概要】：同社は人形を製造する家内企業。1996 年から研究機関との共同プロジェクトを通して、遊びと障害の研究に取り組んだ。

【受賞理由】：‘Design for All’の原則にもとづく人形のデザインを目指し、世界に先がけたプロジェクトを推進、‘Dolls for All’コレクションという成果をもたらした。このコレクションは差別意識をなくし使う人に感覚や運動能力の多様性を尊重する意識をうえつけ、彼らがいう「人形づくりの新しい方法」というスローガンどおり、新しい会社の方向性を強く示すものである。



<団体部門>

・カイシャデテッラーサ社会福祉団体 (Obra Social de Caixa de Terrassa)

【活動概要】：同団体は社会全体の進歩と発展に貢献するという究極の目的のため、社会、文化、教育、環境、持続可能性などの異なった分野の活動をサポートしている。

【受賞理由】：‘Design for All’と個人の自律にコミットし、プレジデント・トーレス・ファルグエラ財団のセンターや Web サイトでの、機能に制約のある人々の要求に応えるアクセシビリティについての顕著な先駆的取り組みによる。特に、カタロニアでの個人の自律のためのリファレンスサイトを目指したポータルのスポンサーとしての促進活動による。



<行政部門> (2 件)


・アスケルスンド市役所 (スウェーデン)

【市の概要】：同市はヴェッテルン湖のそばに位置する小さな町で、すべての来訪者と市民がどんな環境にもアクセスでき、提供するサービスが受けられるリファレンスとなる観光地を目指し、まちづくりをしてきた。


【受賞理由】：初期診断にはじまり、最近 2 年間の‘Flag of Towns and Cities for All’を獲得した具体的な活動の詳細計画を策定し、すべてのプロジェクトと活動を‘Design for All’の視点でグローバルに総合することを通じた、アクセシビリティと‘Design for All’の分野の取り組みによる。



・パルマデマヨルカ市役所（スペイン）

【市の概要】：同市はバレアリック諸島の首都で、長きにわたり、 全ての町役場の部門や町の団体の協会の代表者から技術者や政府高官を組織した委員会を含む'Palma, a City for All'のプログラムを通して'Design for All'を推進してきた。

【受賞理由】：'Flag of Towns and Cities for All'獲得により明らかなように、人々の生活の質を高めることにコミットしてきたことによる。今回で3年連続となるDesign for All財団の顕彰であり、この期間、あらゆる行政レベルでハイライトを浴び、'Design for All'の価値を大変積極的に進化させ統合した。一例として、2009年の人の多様性に対する年間の投資予算の比率は、最少要求の2%をはるかに上回り12%となった。パルマ市の女性市長は、「これは市の民主化の柱として、すべての市民がすべてのサービスを受けられるようにする社会的責任です。」と宣言した。

<参考>'Flag of Towns and Cities for All'とはDesign for All財団が自治体に対して、その公共スペースや施設、交通機関、建物、サービスなどを、市民や来訪者の生活の質の向上のため改善することをコミットし具体的な取り組みを提唱・顕彰している活動です。  <http://www.designforall.org/en/dfa/bandera.html>

詳しくは以下のDesign for All財団のサイトをご覧ください。
<http://www.designforall.org/en/awards2010.html>

【UD2010 ウォッチング】

●論文要約（アブストラクト）の査読・審査が終了、会議本番での発表に大きな期待！

アブストラクトの審査結果は応募者にすでに通知され、本論文の執筆にとりかかっている方も多いと思います。今回は特に海外からの応募の増加が目立ち、2006年を大きく上回る応募をいただきました。国際会議本番では充実した議論が期待され、大変楽しみです。

本論文の投稿システムも開設され、応募者の皆さまへは直接、個別にご案内されているかと思えますのでご確認ください。

<論文募集・審査スケジュール>

5月31日 本論文締め切り

6月1日～ 本論文査読

7月15日～ 査読結果通知・本論文修正依頼

8月31日 すべての原稿締め切り

10月30日～ 11月3日 国際会議にて発表

●国際UD会議実行委員会、IAUD理事会・評議員会の開催状況

2月24日(水) 第7回実行委員会 (IAUD サロン)

3月10日(水) IAUD 2009年度 第六回理事会 (NEC 本社ビル・東京)

3月25日(木) IAUD 2009年度 第二回評議員会 (セルリアンタワー東急ホテル・東京)

【編集後記】○書齋を片付けていたら、「上杉鷹山^{ようざん}」(童門冬二著)を見つけた。かなり前のことだったが、買ったその日に徹夜して読んでしまった記憶がある。鷹山というのは、米沢藩の財政改革を成し遂げた第9代藩主上杉治憲の隠居後の名前である。鷹山の名が特に注目されたのは1961年のことだった。米国の新大統領J.F.ケネディがインタビューで、日本で最も尊敬する政治家として鷹山の名前を挙げたのに対し、日本では「鷹山Who?」と大騒ぎになった。今読み返してみても、示唆に富むところが多くある。藩内の派閥争い、守旧派とのあつれき、当事者意識のない藩士、裏切りと妨害、沈滞する経済……。そうした中、鷹山は様々な苦難を乗り越えて、改革を着実に実行し成果を上げていく。現在の日本の状況を考えると、もっと注目されるべき本ではないだろうか。さらに私が最も感動するのが「小さな火種」の場面である。江戸の藩邸での改革を成し遂げて、鷹山は志を同じくする藩士たちと本国の米沢藩に入ることになる。城に入る直前、改革の心を理解してくれている家来たちに「小さな火種」を分けるのである。「今はこんな小さな火種かもしれないが、これがいつか大きな炎として燃える日がくるはずだ」という言葉と共に。その小さな火種が改革の大きな炎となっていく様は、新たな思いや考え方を広める際にも当てはまるのではないだろうか。少しずつでも着々と進めることの重要性を教えてくれる。(矢)

○先月、標準化研究WGが開催した高齢者・認知関連の勉強会で、東京都健康長寿医療センターの矢富直美先生のお話をお聞きしました。高齢者の認知機能については短期記憶能力が40歳前後をピークに低下するものの、日常問題解決能力や言語(語彙)能力は一般的な予想とは異なり、年齢とともに高まり60歳を過ぎてもまだ向上するそうです。また、別の研究では高齢者の認知能力は午前と午後で大きく変化し、特に早朝においては若年者と大差ないという報告もあります。高齢者の実態もわれわれが子供のころに抱いていたイメージとは大きく変わっていて、これからその年代に向かうものにとっては勇気づけられる話です。しかし、この話にはまだ先があり、そのためには認知機能を低下させない食事や生活習慣、モチベーションが大切ということです。バリア・フリーならぬ「バリア・アリー(有り)」という言葉が使われていましたが、動けるうちは日常生活のなかには適度な抵抗感があつた方が良いという考えです。住空間プロジェクトの「UDプラス」にもつながるコンセプトで、超高齢社会をむかえる日本のUDの方向性を考えるひとつの大事な視点ではないでしょうか。(鳶)

IAUD Newsletterでは、誌面を会員の皆さまのUDに関わる情報交換の場と位置づけています。ぜひ、会員企業のUD商品開発事例やPJ/WGの活動成果事例等の情報をお寄せください。また、国内外のUD関連イベント、シンポジウム等の開催情報もお知らせください。ご連絡は、news@iaud.netへ直接、メールをお送りいただくか、事務局あるいは情報交流センターまでお問い合わせいただいても結構です。

無断転載禁止

IAUD Newsletter vol.3 No.1
2010年4月7日発行
国際ユニヴァーサルデザイン協議会

事務局 : 225-0003 横浜市青葉区新石川 2-13-18-110
電話: 045-901-8420 FAX: 045-901-8417
e-mail: info@iaud.net
情報交流センター: 104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9
(IAUD サロン) トヨタ八丁堀ビル 4階
電話: 03-5541-5846 FAX: 03-5541-5847
e-mail: salon@iaud.net